



ショートコメント

★★★

Data 2024-88

太陽と桃の歌

2022 年／スペイン・イタリア映画

配給：東京テアトル／121 分

2024（令和6）年12月21日鑑賞

テアトル梅田

監督・脚本：カルラ・シモン

出演：ジョゼ・アバッド／ジ

ョルディ・ブジョル・

ドルセ／アンナ・オテ

イン／アルベルト・ボ

スク／ジャコブ・ディ

アルテ／アントニア・

カステイス

👁️👁️ みどころ

ベルリン国際映画祭で金熊賞を受賞！しかも、テーマが桃農園の土地明渡しを巡る、大家族の葛藤の物語、と聞けば、こりゃ必見！

タイトルも素敵だし、スクリーンに映るスペインのカタルーニャ地方の美しさも申し分なし！ところが、肝心のストーリー構成が私にはイマイチ……。残念ながら私には、ソーラーパネル設置の提案を伴った土地明け渡し請求に対する、家族それぞれの意見の対立を中心とするエピソードの羅列としか思えなかったが、さてあなたは……？

—— * —— * —— * —— * —— * —— * —— * —— * —— * —— *

◆2022 年の第 72 回ベルリン国際映画祭で金熊賞を受賞！そう聞けば、こりゃ必見！しかし、本作の監督は、2017 年の長編デビュー作『悲しみに、こんにちは』（17 年）で世界的に高く評価されたというスペインのカルラ・シモン監督だから、少し心配。だって、私の同作への評価は極端に低かった（『シネマ 42』未掲載、星 3 つ）のだから。

◆チラシによると、本作は「カタルーニャで桃農園を営む大家族に突き付けられた、まさかの立ち退き命令。変わりゆく世界のしくみと変わらない家族の絆の物語。」。さらに「リアルな家族のやりとり、時に笑わされ、時に目頭が熱くなる」との見出しで、次の通りのストーリーが紹介されている。

カタルーニャで、三代に渡る大家族で桃農園を営むソレ家。例年通り収穫を迎えようとした時、地主から夏の終わりに土地を明け渡すよう迫られる。桃の木を伐採して、代わりにソーラーパネルを敷き詰めるというのだ。父親は激怒するが、妻と妹夫婦はパネルの管理をすれば「楽に稼げる」という囁きに心を動かされていく。賭け事に懸ける祖父、取り付く島のない父、畑の片隅で大麻栽培を始める長男など、てんでバラバラに桃園の危機を何とかしようとするが、大げんかが勃発。一家に大きな亀裂が入ったまま最後の収穫が始まろうとしていた……。

このように土地の立ちのき命令をめぐる家族の物語だと知ると、なおさら本作は必見！

◆本作の舞台は、カルラ・シモン監督のふるさとでもある、スペインのカタルーニャの奥地にある小さな村アルカラス。主人公はその村で三代にわたって桃農園を営むソレー家だ。カルラ・シモン監督の父親の兄弟たちは、スペインのカタルーニャ地方で桃農園を営んでいたそうだから、本作は同監督の体験談！？

それはともかく、本作冒頭、ゆっくりとしたカメラの移動の中で映し出されるアルカラスと桃農園の姿はのどかそのものだ。スペインのカタルーニャ地方はさまざまな映画で取り上げているが、関心のある人は、パンフレットにある奥野良知氏の COLUMN「カタルーニャの独自の言語・歴史・アイデンティティ」を参照されたい。

◆アルカラス村の美しい風景とそこで遊ぶ子どもたちの風景が一通り紹介された後、本作の物語は、年に1度の収穫を迎えた今、地主のピニョールから土地の明渡しを求められるところから始まる。ソレー家は異議を唱えようとしたが、祖父のロヘリオは契約書を書かず、口約束だけだったから対抗するのは到底ムリ！もともと、ピニョールからは、「君たちを追い出さずに済むように、パネルの管理をやらないか」と持ち掛けられたが、ロヘリオの息子で今や一家の大黒柱であるキメットは、「論外だ！」と吐き捨てることに。

◆残念ながら、私には、ベルリン国際映画祭で金熊賞を受賞した本作の価値がさっぱりわからなかった。地主からの土地明け渡し請求とソレー家の生計維持のためのソーラーパネル設置の提案に、ソレー家のそれぞれが戸惑ったのは当然だが、本作は一体何を言いたいのか？パンフレットにあるカルラ・シモン監督のインタビューにもかかわらず、私にはそれがさっぱりわからないまま、ただただ、さまざまなエピソードを並べ立てていくだけの本作に不満がいっぱい！

◆ちなみに、ソレー家は三代が同居している大家族。パンフレットにあるソレー家相関図はわかりやすいが、これだけの大家族が一緒に生活していれば、突然の土地明け渡し請求に対してそれぞれの意見が異なるのは仕方ない。しかし、私には、本作はそれをただらと並べただけの映画に思えてしまった。したがって本作の評論はショートとし、評価は星3つ。

2024（令和6）年12月23日記